マッチ売りの少女　アンデルセン

たいへん寒い日でした。雪がふっていました。あたりはもう暗くなりはじめていました。それは、一年の一番おしまいの夜、大晦日の晩でした。

貧しい小さな女の子がひとり、帽子もかぶらず、はだしで、通りを歩いていました。家を出たときには大きな木靴をはいていました。それはなくなったお母さんのものでした。ところが、さっき、馬車が二台走って来たので、いそいで通りを横切ろうとしたとき、女の子は転んで、かたほうの木靴をなくしてしまいました。もうかたほうは、男の子が持って行ってしまいました。そんなわけで、女の子は小さいはだしの足を、寒さのために赤く青くして歩いていました。

女の子は、古ぼけたエプロンの中に、売り物のマッチをたくさん持っていました。手にもひとたば持っていました。けれども、今日は一日じゅう売り歩いても、だれもマッチを買ってくれませんでした。お金を持って帰らなかったら、お父さんにぶたれます。女の子はお腹がぺこぺこでしたが、家に帰ることはできませんでした。

通りの家々の窓という窓から明かりがさしていて、おいしそうながちょうの肉のにおいが流れていました。

「今日は、大晦日の晩だもの」と、女の子は思いました。そして、せめて寒さをふせごうと、家と家のあいだのすみに、体をちぢめてうずくまりました。それから、こごえた指先をあたためたくて、マッチのたばの中から一本ぬいて、壁にこすりました。

シュッ！

なんとよく燃えることでしょう。明るい炎は、ろうそくの火のようでした。女の子はその周りに手をかざしました。まるでストーブの前にすわっているようでした。女の子は、足もあたためようと、そっと足をのばしました。そのとたん、マッチは消えました。ストーブも見えなくなりました。女の子は、手にマッチの燃えさしを持ってすわっていました。

女の子は、新しいマッチをすりました。炎は明るく燃えあがりました。そして、壁がすきとおって、家の中が見えました。部屋には白いテーブルかけをかけたテーブルがありました。テーブルの上には、きれいなお皿が置いてあって、スモモやリンゴをつめた焼いたがちょうが、おいしそうにほかほかと湯気を立てていました。がちょうは、いき

なりお皿から飛びおりて、床の上をよたよた歩いて、女の子のほうへまっすぐやって来ました。そのとき、マッチが消えました。目の前には、冷たい壁があるだけでした。

女の子は、新しいマッチをすりました。すると、女の子はこの上なく美しいクリスマスツリーの下にすわっていました。大きなツリーの緑の枝の上で、何千というろうそくが燃えていました。女の子は思わず手をのばしました。そのとたん、マッチが消えました。すると、クリスマスのろうそくは、どこまでも高く空へ昇っていって、星になりました。そのうちのひとつが飛んで、夜空に明るい光の線をひきました。

「あっ、だれかが死ぬんだわ！」と、女の子はいいました。むかし、なくなったおばあさんが、星がひとつ落ちると、そのたびに、ひとつのたましいが神さまのところへ昇っていくんだよといっていたからです。

女の子は、またマッチをすりました。明るい光の中に、おばあさんが立っていました。おばあさんは、やさしく、しあわせそうに、光り輝いて見えました。

「おばあさん、わたしをつれて行ってちょうだい！」と、女の子はいいました。「マッチが消えるとおばあさんは行ってしまうんでしょう！あのあたたかいストーブや、おいしそうながちょうや、すてきなクリスマスツリーのように」

女の子は、おばあさんをしっかりひきとめておこうと思いました。そこで、たばの中の残りのマッチをぜんぶすりました。マッチはま昼よりも明るくかがやきました。その光の中で、おばあさんは、女の子を腕に抱きあげました。ふたりは、光につつまれて、高く高く昇っていきました。もう寒いこともお腹の空くこともありませんでした。

あくる朝、女の子は、赤いほおをして、ほほえみをうかべて、死んでうずくまっていました。古い年の最後の晩に、こごえ死んだのです。

新しい年の朝日が、小さななきがらの上にのぼってきました。小さななきがらは、マッチを持ったままうずくまっていました。そのうちのひとたばは、ほとんど燃えつくしていました。

「この子はあたたまろうとしたんだね」と、人びとはいいました。だれも、この女の子が、どんなに美しいものを見たか知りませんでした。どのように光につつまれて、おばあさんといっしょに新しい年のよろこびをお祝いしに行ったか、知っている人はだれもいませんでした。

村上郁再話